

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

『娯楽センター』の称号をいただいて

— 橘女子大学AVセンターからの報告 —

武藤賢吾
(橘女子大学)

人は今、それを『娯楽センター』と呼ぶ。それはこれを、半ば羨望の情を隠しながら、アカデミズムの仮面を被って非難するやりかたである。だから私は敢えて言う、「ああ、『娯楽センター』で結構。徹臭い、人も寄りつかないようなお飾りだけの施設であるより、どんなにかましなことか。」

この通称『娯楽センター』とは、一昨年竣工された図書館棟一階に併設されるAVセンターのことである。そして私は、この視聴覚施設にプランニングの段階から関わってきたライブラリアン(と言っても少々胡散臭い部類だが)である。

さて、このAVセンター、この名誉な称号を頂戴するだけあって、ちょっとユニークなサービスが特徴(売り物)であり、その甲斐あってか、もっかのところ飛び抜けた利用者数が大の自慢である。

本学は学生数約1,400名。英語・英文、国文、歴史の三学科をもつ文学部単科の四年制女子大学である。実はこの1,400の学生が、昨年度(1986年度)一年間で、一人平均5回以上AVセンターを利用してくれた。年間総利用者数7,480人である。今年はまだ年度の途中だがすでに総利用者数は昨年を早くも越えて、延

べ10,000人を数えてしまった。これも一人あたりに換算すると、一人平均7回となる。年間一人7回と言え、そう大それて聞こえないが、多い月は月間の延べ利用者が1,700人を越え、日単位で見ても、一日100人を越える日がザラにあって、昼休みにはオーバーでなく順番待ちの学生の列ができるのである。

ちなみに、(言い遅れたが)本学のAVセンターはそう大規模な施設ではない。ビデオ・ブースはVHS6台、Betaが2台。それから多目的のAVホールにはグループでビデオが見られる設備が3台あって、これも自由に使用させるが、ここは授業にもよく使われるので、常時学生が利用している訳ではない。また、ヘッドホン・ステレオで音楽を楽しむようなサービスもして、先程の利用者数の中にはこの利用者も含まれるが、その貸出しするヘッドホン・ステレオも、たったの10台しかない。こんなお粗末な施設を年間10,000人以上の学生が利用しているということである。

では何故、このような利用者(私は支持者と言っている)が獲得できるのか。それは簡単で、AVセンターには彼女たちの利用したい資料が揃っていて、それらが自由に、気軽に利用できるからである。

ビデオ・ソフトは最近人気の映画もどんどん入れ、音楽もCDでヘビメタでもヤング歌謡でもできるだけ揃える。多目的ホールは（授業時間外は）自由に解放し、カーペットが敷かれたその部屋には座椅子やクッションも置かれていて、そこでは寝転んでビデオを楽しむことができる。「こんなこと（図書館が）やって良いのだろうか？」と思われるような、開放的でComfortableなAV施設だからである。

さて、このような目立つ存在がある場合、それへの反発が起こるのは世の常である。いわく、「AVセンターは学生の遊び場になりさがっている」、またまたいわく「学生の『遊び』に予算をまわすなど言語道断！ もっと『教学』にこそ金をかけるべきだ」。

また、新棟ができて以来、多くの見学の方たちが本学に見えたが、そういった方の中からは大抵「たいへんユニークな運営で素晴らしいと思いますが、この利用者のうち、娯楽的な利用と学習の為の利用との比率はどのくらいでしょうか」という質問がだされる。私は、このような質問には、「遠回しな皮肉だな」と思いつつ、いつもこう答えている。

「ビデオ映画などの利用の場合、どこまでが学習で、どこからが娯楽と言えるでしょうか」。

今紹介したようなご批判は、伝統的な「アカデミズム」の立場からすれば当然なのだろう。しかし私は、逆にそれは、今の若者達の実態からかなりズレた「石頭」的発想であって、かえってその「教学施設」の有効な運用を硬直化させるもの以外の何物でもないと思うのである。映画を観ていてどこが遊びなのか。学生達も捨てたものじゃない。彼女らは自分で立派に判断し、自分でちゃんと消化して、血や肉にしていく力を持っている。私はそう信じている。彼女らは、もっとしたたかで、もっと逞しいのである。

こう言うと、「それは心情論だ」の一言でかたづけられそうなので、もう少しもっともらしい事を述べる。

第一に、言語感覚の問題。たとえば、外国映画を楽しみながら、自然とその言語が耳に慣れてくるといふ事がある。それは画面に字幕が出るものでも良い。たとえほとんど字幕に頼ってでしか内容が理解できないようなレベルでも、ちょっとした言い回しが耳の中に飛び込んできて頭に残るといふことは誰でも経験があるのでないだろうか。だから、語学の勉強は、なにもNHKやBBCの「教材」だけでしかできないといふことは絶対がないのである。

第二に、教材に感ずる興味度の問題。特に最近の若い教員の中には、講義でいろいろなAV資料を使う例が多くなったが、これは映像世代といわれる今の若者達に少しでも違和感なく教材に親しませようといふ工夫なのだろう。本学の今年の例でも、『コンプリート・ビートルズ』や『バック・トゥー・ザ・フューチャー』を觀せて、その原作書を図書館の指定図書にした講義、また、『カラー・パープル』をとりあげながら、アメリカの黒人文学を語り、さらに黒人差別の問題まで掘り下げる講義、等等。勿論これはほんの一例であるが、これらがきっかけで、学生の利用も当然急増するわけである。

第三には学習動機の問題がある。AVで觀た映画に感動したのがきっかけで、四回生の卒業論文のテーマにその作家を選んだといふ話を時々耳にする。『嵐が丘』や『ロミオとジュリエット』など古典的な名作の場合は言うまでもないが、最近は卒論で新しい流行作家が頻繁にとりあげられるそうである。先程あげた『カラー・パープル』はアリス・ウォーカーといふアメリカの黒人女流作家の作品だが、このほか最近映画化されてヒットしたものに、ジョン・アーヴィングの『ホテル・ニュー・ハンプシャー』やE.M.フォースタ

一の『眺めのいい部屋』などがあり、原作者を知らずに映画から近づいて行く好例になっている。

例はもうこのくらいで良いだろう。私が言いたいのはつまり、それが「映画」だから、それも「流行のビデオ」だからという理由だけでその利用者に『遊び』というレッテルを貼ること、これが最もいけないのだということである。だから「映画のビデオの利用が多いからAVが『娯楽センター』化している」という議論は大いなるアナクロニズムであると断じたい。

私は彼女達の「判断力」「審美眼」「真理探求力」、そして貪欲な「向学心」を信じて、これからもどんどん彼女達の独自の感覚に合

うものを提供していきたいと思っている。それでも尚、利用の「質」を問う人にはさらに言う。

「広い裾野があってこそ高い山は聳え立つ」。

私は今、ライブラリアンは発想の転換をしなければならぬ時にきていると思う。今の学生を「新人類」と言って嘆くより、「旧人類」と言われ哀れまれている自らの姿を、もう一度鏡で見直すべきである。

— 大図研ゼミナールから —

京都支部では、「大図研学校」を発展させ、現場に密着したテーマを科学的に解明する場として、又、日常的に学習し、研究する図書館員を育てる場として、昨年12月から「大図研ゼミナール」を開いております。今回、ゼミ「資料提供論」の参加者から声を集めましたのでここに紹介します。

大図研ゼミに参加して

蒲 彰子
(京都大学工学部)

正直いってお誘いを受けた時は迷いました。ベテランの方々と勉強するのは、確かにプラスになる……が、しかし……<しんどいのはいやだ><恥をかきたくない>……が、しかし……<やらずに後悔するより、やってから後悔の方がまし><恥かきは新入りの特権>です。

ところが、重い足取りで行った12月の開会式は、担当教員の森先生やメンバーの方々たちとちゃぶ台(?)を囲むといった感じの、あっと驚く寺小屋風で、肩の力が抜けたのでした。

図書の仕事に就いて2年目にはいり、少し周囲の状況、その中に於ける自分(あるいは自分のいる図書室)の位置が見えてきたように思います。狭くて暗い視界をより広げ明るくするために、このゼミから何かを吸収したいと思っています。

資料提供論ゼミに参加して

森山とき子
(同志社大学)

最初、このゼミにお誘いを受けた時は、迷ってしまい返事を延ばし延ばしにしていました。でも、自分からはなかなか勉強することができないので、皆様と一緒に勉強させていただこうと決心しました。

初めての日、緊張して着席すると一番奥に森先生らしい方が座っておられ、第一印象はきびしそうな方にお見受けしました。ところが話し合いが始まってみると、私達の話の一つ一つなげきながら真剣に聞いていただき、大変感激しました。

この先生で、このゼミでなら、これからも何でも聞けて、何でも話せるような気がして、今は次回が楽しみな私です。

あゆみ始めたわが森ゼミ

— 資料提供論 —

若井勉
(立命館大学)

不安と期待がバランスをとりながら始まったわが森ゼミは、第1回目のゼミが入るや不安の垣根は一挙に取り払われた感であり、今ホッとしている。

そこには大学の図書館、研究室で働く図書館員同士の同じ姿勢と思いがあり、お互いにそれがともに確かめられつつあるからであろうと思っている。それに森耕一先生の熱意とキャラクターを見逃すことはできない。それはまた大学図書館員への強い期待でもあり、その厳しさと優しさのなかから我々は十分に汲み取らねばならないし、このゼミに課せられているわれわれの任務であろうとけとめ、心を新たにしているところである。

メンバーは5大学13名で、内訳は中央図書館で働く人と研究室で働く人が半々ぐらいであり、図書館の経験も3年～20年以上と幅が広い。その意味では相互の交流をより大切にしながら共通の基盤を大きくし、やりがいのあるテーマを設定していきたいと思っている。第1回は自己紹介のあと、前川恒雄著『われらの図書館』の第2章、図書館のしごとをもとにフリートークングを行なった。日本における公立図書館の発展を担ってきた図書館思想とは何か、それがどのように発展してきたのか、大学の研究室や図書館とどう異なっているのかなど、お互いの理解や問題意識の所在などを話し合った。次回は、(1)京都大学化学工学教室の城山秀子さんに「教室内の生産情報のDB化をめざして」(大学図書館研究会論文集14)、(2)西上さんに、立命館大学の図書館新入生ガイダンス、(3)各自から、RSでの質問例の持ちより(難問を含む)交流をする予定で今後のテーマ設定についての方向づけもしていきたいと考えているが、あせらずにじっくり、ゼミ員の総意ですすめたいと考えている。

とにかく、歩きはじめたばかりであり、9月頃をとりあえずの目途として、月1-2回程度で加速がつけば、研究の成果を論文のようなものにまとまればと心ひそかに期待している。他のゼミの経験も交流し、お互いに新しい試みを何とか成功させたいと思う。私自身もおいてけぼりにされないよう気を若くしてゼミ員とともに歩んで行きたい。

(Bゼミ世話人)